北宋文人の養鶴趣味

坂井　多穂子

一、はじめに

鶴を飼育すること（本稿では「養鶴」と称す）は典雅な文人趣味の一つとして、遅くとも明代後期には定着していた。明の天啓元年（一六二一）成書の『長物志』巻四には鶴の特産地や、良質の鶴の見分け方、飼育の設備やしつけ方等が具體的に記されており、當時の文人たちの養鶴に對する關心の高さを物語っている。

該著の和訳を監修された荒井健氏は、その解説の中で、明代以前の養鶴についても触れ、「鶴の愛好が顯著になるのは、唐の白樂天および周辺の人々の間においてだが、北宋初期の隠逸詩人林逋は、二羽の鶴の放し飼いで特に名が高く（『夢溪筆談』巻十）、以後鶴を飼うのは文人風雅の一つとなった」[1]と概括し、また、「文人という一個の主體が、その日常生活を構成するさまざまな客體すなわち生の充足根據としての媒體、とどうかかわるか、どう評價しどう選擇するか」という「實踐活動」が、「明らかに主體の意識にのぼり始めるのが宋代」であるとも指摘[2]しておられる。後者は、ひとり養鶴趣味に限った指摘ではないが、むろん養鶴をも含めた総括的な判斷に相違ない。荒井氏のいう通り、中唐の白居易（七七二-八四六）と北宋初の林逋（九六七-一〇二八）が後世の文人趣味に大きな影響を與え、宋代文人がより自覺的に養鶴を實踐したとするならば、中唐から宋代への變化はどのような形で實

現し、何がそれを促したのであろうか。

筆者はこれまで、文人の養鶴に關連して、白居易や林逋、また南宋の陸游や江湖詩人をとりあげ論じてきた。[3] 白居易については、六朝時代、優美な姿や舞を中心にその脱俗性がとりわけ尊ばれたのとは異なり、自然な姿で洛陽の庭にたたずむ鶴をみずからの伴侶と見なして家族愛にも似た感情を寄せるようになったことを、その最大の特徴として指摘した。一方、南宋に着目したのは、靖康の變によって士大夫の大半が養鶴に適した風土の長江以南（とくに江南）に移住したことと、祠禄官の増員にともない士大夫の多くが郷里に長期間滞在できるようになり、養鶴のための条件が整い、養鶴への憧憬と意欲を掻き立てたに違いないと考えたからであった。そして、實際に南宋士大夫の間では、鶴の貸し借りや贈答も行われ、白居易の時代に比べると、養鶴ははるかに一般化し、そのあり様も多様化していることが彼らの詩によって確認できた。加えて、士大夫の周縁に位置する江湖詩人の中にも、養鶴を詠じる作例があることから、南宋の後期に至ると、養鶴の裾野がさらに広がり、士大夫の外縁にまで及んでいることを確認した。

本稿では、文人活動の「主體の意識」のめばえである北宋期に着目し、北宋文人の養鶴の諸相を具體的に探ることを主たる目的とする。養鶴は隠棲の象徴であると同時に、六朝や唐代においては貴族趣味の表象でもあった。北宋は唐代と南宋の狭間にあって、貴族趣味が江湖の人々に広がる過渡期である。また、北宋初期の隠士林逋は養鶴文人の中でも別格的存在である。まず林逋の養鶴の實態を論じた前稿を簡潔に紹介し、北宋文人の養鶴が林逋の影響を受けたものか否かを確認する。そのうえで、隠士と士大夫に分け、それぞれにおける養鶴の様相を分析したい。

二、北宋における林逋へのまなざし

本節では、拙稿「林逋と鶴――『梅妻鶴子』弁」[4]を簡単に紹介し、北宋養鶴文人における林逋の影響の有無を述べたい。

養鶴を「文人風雅の一つ」（荒井氏）へと押し上げた功労者林逋は、後世（明代）には「梅妻鶴子」（梅を妻とし、鶴を子とする）と称され、養鶴文人の代表として憧憬の對象となった。その淵源は、林逋の同郷杭州（浙江省）の人、沈括（一〇三一–九五）がその著書『夢溪筆談』に収めた林逋の鶴に關する逸話[5]にある。しかし考察の結果、この逸話は實話ではなく、林逋の没後に生を受けた著者、沈括がおそらく當時巷間に流布していた話を基礎に創作したものである可能性が高いと結論づけた。林逋と交流した同時代の知友が彼に言及した著作には、彼の飼う鶴はほとんど記されておらず、北宋當時すでにあまた存在した養鶴文人のなかにあって、林逋は異彩を放つ特別な存在とは見なされていなかったと考えられるからである。

また、鶴を主題とした林逋の詩二首のうち、「榮家鶴」詩はおそらく林逋自身の飼う鶴を描いた作ではないと判斷できる。もう一首の「鳴皐」詩は、題下注を踏まえると、自身が飼育する鶴を詠った詩ということになるが、詠いぶりはその他の詠物詩と大差なく、きわめて淡々とした筆致である。よって、鶴に對する林逋の特別な想いをこの詩から見いだすことはできず、林逋自身が己を特徴的な養鶴文人だと認識していなかった可能性が高い。北宋の舊を傳える古い傳本が完全な形では傳わらないため確かなことはいえないものの、「鳴皐」詩の題下注がもしも明代の段階で新たに加えられたのだとしたら、それは林逋の詩集の中に「鶴子」の明証を見出したいとする編者の作

爲によるものと見なすことができる。そして、そのことは、詩集が再編重刻された當時において、「梅妻鶴子」の称が林逋の、そして彼が眠る孤山のトレードマークとして確立してすでに久しいことを、今日の我々に傳えている。

そして、南宋の乾道年間に『夢溪筆談』が刊行されるに及んで、林逋と鶴の逸話も文人の間でより一層傳播するようになり、逸話の舞臺、孤山が都臨安の傍らにあるという事情も相まって、實際に林逋の庵の迹や墳墓に詣でることも一般化した。かくて、南宋文人の間に林逋の鶴の特殊性についての認知が広まるとともに、ゆかりの地を探訪したことから生じる感情移入が、「梅妻鶴子」の基盤を形づくったと考えられる。南宋詩人の作品を通覧して確認できたのは、「梅妻鶴子」の称こそまだ生まれないものの、「山園小梅」詩の梅と『夢溪筆談』の鶴は林逋を特徴づける二大要素として南宋後期までに定着をみた、ということであった。

以上により、林逋の養鶴に對する憧憬は南宋に始まったものであり、北宋文人の養鶴は林逋への憧れとはまったく無縁のところで、おこなわれたと言ってよい。北宋士大夫は、経済面では唐代士大夫ほど恵まれてはおらず、飼育条件においては南宋士大夫ほど恵まれていなかった。とはいえ、北宋にも少なからぬ養鶴文人が存在した。

鶴は君子や賢人、また神仙の使者や長壽、さらには富貴等々、多様なイメージを付與された鳥である。古來、養鶴は王子喬の傳説が物語るように仙界や隱棲の象徴であり、また、衛の懿公や羊祜に代表される貴族趣味の表象でもあった。門閥の衰退や科挙出身官僚の臺頭という社會變革は、士大夫の養鶴趣味にいかなる變化をもたらしたのか。いっぽう、社會から隔絶された隱士の養鶴は、士大夫のそれとは異なるものだったのだろうか。次節以下、『全宋詩』を主材として、北宋の養鶴概況を述べたうえで、特徴的な北宋養鶴文人の様相について分析をおこなう。

三、北宋養鶴詩の概況

北宋人は林逋の養鶴に憧れることを未だ知らずにいた。では彼らのあいだでは、養鶴趣味はどの程度浸透していたのであろうか。本節以降、『全宋詩』から養鶴詩を抽出し、特徴的な養鶴詩人を取り上げる。なお、養鶴を詠った詠鶴詩や、鶴の授受に當たって新舊の飼い主の間で交わされた作、鶴の悼亡詩、さらに、第三者所有の鶴を題材にした唱和詩群も養鶴詩とみなすこととする。調査にあたっては、とりわけ詠物詩ではその養鶴が事實か否かを判別しがたく、なかには虚構の養鶴詩とおぼしき作例もあるが、養鶴が詩材として定着していることを示す傍証となり得るため、これも含めることとする。

本稿末尾の付表は、『全宋詩』の北宋部分における養鶴詩と作者のリストである。この表から讀み取れる北宋養鶴詩の概況として、以下の六つの点を指摘しておきたい。

（一）北宋養鶴詩人における林逋の立場について。林逋に先行する養鶴詩人には、少なくとも、隱士では魏野、士大夫では潘若沖や王禹偁、張維がいた。士大夫とはいえ小官である潘若沖すら養鶴していたのだから、養鶴は高官や隱士に限定された趣味ではなく、すでに幅広い階層に普及していたと推測できる。林逋は當時において養鶴趣味を先導する立場だったわけではなく、數多存在した養鶴文人の一人であったことは前節に述べたが、この表からもあらためて確認できる。

（二）北宋養鶴詩の作者と詩の傾向について。養鶴詩の作者は管見では二十七名をかぞえ、そのうち、詩題や内容からみずからの養鶴體験を詠ったとおぼしき養鶴主（表の◎印）は、半數弱の十二名である。彼らの養鶴詩の多

くが、鶴の授受の際の作品や、鶴の死を悲しむ悼亡詩である。すなわち、鶴の獲得や喪失が彼らの養鶴詩制作の動機となった。いっぽうで、北宋中期に、自身は養鶴せずに他人の鶴を題材に詩作する詩人（△印）が増加している。養鶴が詩材として定着したことを示すと同時に、鶴は一文人によって獨占して樂しまれる愛玩物ではなく、養鶴主の所屬する文人集團の中で詩材を提供する、いわば共有の娯樂とみなされたことを示している。それはすなわち、世間から隔絶された隱棲空間よりはむしろ、士大夫たちの都市での交流の中に鶴が居て、彼らに話題を提供したことをも示唆している。

（三）養鶴主の総數について。鶴の飼い主（養鶴主）を、詩作の有無を問わずに抽出すると、次の三十五名となった。

〈北宋の養鶴主〉：三十五名

●養鶴詩を制作する養鶴主：十二名

【隱士・僧】魏野・林逋・釋智円

【士大夫】潘若沖・王禹偁・張維・范仲淹・文彦博・韓琦・郟亶・劉弇・孫覿

●養鶴詩を制作しない（あるいは自身の養鶴詩が現存しない）養鶴主：二十三名

【隱士・僧】廖融

【士大夫】羅處約・柴侍御・劉小諫・薛省判・柳太博・梅摯・陳虞部・李公素・邢太保・趙子晝・呉子仁

【身分不詳】馮亞・薛階・卞氏・劉易・李少師・石港高侯・海陵蘇氏・欒家・郝氏・柳元禮・伯氏

三十五名のうち、第三者の詩題に記されることで名を残した養鶴主は二十三名で、全體の三分の二を占める。その背後には、詩を作らず、記名もされずに記録からこぼれ落ちた養鶴主がさらに大量に存在したはずである。[6] 養鶴主の實數はこの數倍、いや數十倍いたとしてもおかしくはない。數百名の養鶴主がいたとすれば、養鶴趣味は北宋においてすでに定着していたと看做してよい。

（四）鶴の入手先と養鶴地について。士大夫養鶴主が鶴を入手したきっかけは、特定可能な限りでは、江南滞在中に江南の人から鶴を贈られることが多いようだ。拙稿[7]に述べたとおり、鶴には黒竜江と江南とを南北に旅して生息する習性があり、本來、「養鶴環境は江南が最適」である。北周の沈重（五〇〇-八三）は、梁の滅亡後に北周に仕えた人だが、著に「呉人の庭園や士大夫の家ではみな鶴を飼う」[8]といい、温暖な江南では六朝期にはすでに養鶴が普遍的であったと述べている。北宋になると、鶴の生育に最適な環境とは言えぬ中原においても、梅摯や「邢太保」（王安石詩）、また隠士の魏野などの養鶴主は確認できる。隠士や僧侶だけでなく、轉任をくり返す士大夫層に養鶴主が多く見られることから、交通網の発達（後述）によって、養鶴がおこなわれる地域がさらに範囲を広げていたと考えられよう。

（五）養鶴詩の作者の詩風について。表の養鶴詩人は白體と晩唐體の代表詩人が多く、楊億ら西崑體の代表詩人は含まれない。これは西崑詩人が自身の實生活の描寫をしなかったためであり、養鶴をおこなわなかったことの証左にはならない。じじつ、『西崑酬唱集』巻上[9]の、劉筠・楊億・張詠・任隨・銭惟演の五詩人による「鶴」詩五首に、飼われる鶴らしき描寫は皆無ではないが、[10]實景ではなく象徴性を描くことに比重が置かれ、主人と鶴との交情は全く描かれていなかった。「悵望青田碧草齊」（楊億）や「縱在泥塵性不卑」（張詠）のように、「泥塵」に居て「青田」を想う「潔白本天姿」（張詠）を持つ野鶴の描寫が大半を占めている。

（六）雅俗の問題について。養鶴詩は人と日常生活を共にする鶴を題材とするため、ときに濃い生活臭を放つ。西崑詩人に養鶴詩が少ないのはこれに起因しよう。鶴は風雅な文人趣味、すなわち「雅」な物ではあるが、日常生活の描寫は「俗」でもある。養鶴詩は「雅」と「俗」の兩面を持ち得るのである。養鶴詩人は雅と俗の間を往來し、俗を嫌って雅に走れば、野鶴と養鶴の區別が曖昧になり、養鶴詩との判斷が可能な材料がかき消えることになる。

次節からは、養鶴する隱士と士大夫について、魏野と歐陽脩らを中心に考察する。

四、魏野――養鶴する隱士――

「山林詩人」魏野（九六〇-一〇一九）は林逋よりも八歲早く生まれ、陝州（現河南省）に隱棲して養鶴した。そこは越冬のために南下する鶴が立ち寄る可能性はあるものの、生息地から離れた地である。魏野には、鶴を讓り受けた謝禮の詩や讓渡を懇願する詩が北宋最多の四首現存し、鶴の入手に貪欲である。これは江南の養鶴詩人には見られない傾向である。最適とは言えぬ養鶴環境ならではの苦心と、その中でも養鶴を繼續せんとする熱意がそこにうかがえる。

では、魏野が養鶴した住まいはどのようなものだったのか。『宋史』卷四五七「隱逸上　魏野傳」によれば、

居州之東郊，手植竹樹，清泉環遶，旁對雲山，景趣幽絶。鑿土袤丈，曰樂天洞，前爲草堂，彈琴其中，好事家多戴酒肴從之遊，嘯詠終日。

陝州の東の郊外に住み、手づから竹を植え、清泉がその周囲を巡り、そばには雲のかかった山が高く聳え、そ

の景にはきわめて幽玄な趣がある。土を横に一丈掘って樂天洞と名付け、その前に草堂を作ってその中で琴を弾くと、物好きな人々が酒肴を携えてやって來てともに遊び、一日じゅう歌っていた。

というように、草堂のそばに竹を植え、その外を澄んだ泉が流れ、さらにその向こうには高山が聳えるという幽玄な趣のなかで、魏野は客人たちと一日じゅう飲酒や吟詠をして過ごした。竹林の七賢を想起させる風雅な隱棲である。客人のなかには寇准や王旦ら當時の高官も含まれていたという。その草堂で、士大夫の友人らと共に鶴を鑑賞し、養鶴の樂しみを共有していたであろう。魏野は「小さな生活に甘んずる小さな境界」を好んで「祖述」[11]した。鶴の譲渡に謝意を表したり、鶴の死を友人と共に悲しむ魏野の養鶴詩群は、彼が養鶴趣味を友人たちと共有していることを示すものであり、交友詩の様相をも帯びている。すなわち、魏野にとって養鶴は、閉ざされた隱棲空間での一人きりでの樂しみではなく、文人集團で共有される趣味になっていたと言える。これは中唐の白居易らにすでに見られる傾向であり、また、南宋の陸游の養鶴詩には欠如している要素である。陸游は鄕里紹興で數十年、養鶴を續けたが、養鶴の樂しみを士大夫の友人達と共有することなく、一人静かに鶴を飼っていた。陸游に比べれば、魏野の養鶴のありかたは隱士というよりむしろ士大夫のそれに近い。

魏野は當時において林逋よりも詩名が高く、[12]没後には著作郎を追贈され、子孫は租税や労役を免除された。[13]詩名は生前のうちに國外にまで轟いていた。大中祥符年間（一〇〇八-一六）初に訪朝した契丹の使者が、契丹本國には魏野詩集の前半しか傳わらぬと訴えて、魏野集の完本を眞宗に所望したほどである。[14]かくも高名なる魏野を、眞宗が召し出さんとして斷られた話は有名だが、詳細は文獻によって若干ことなっている。『宋史』卷八「眞宗本紀」には「草澤の魏野を召すも，疾と辭して至らず」と簡潔にまとめられているが、李頎『古今詩話』三五六條では養

鶴にも触れられている。いわく、

章聖幸汾陰，回望林嶺間，亭檻幽絶，意非民俗所居。時魏野方教鶴舞，俄報有中使至，抱琴踰垣而走。[15]

章聖（眞宗）は汾陰（現山西）を行幸した帰りに山林を眺めやると、あずまやがことのほか清幽で、俗人の住みかにあらざる風情であった。折しも魏野は鶴に舞を教えていたところ、ふいに皇帝の使者の到着を知らされ、琴を抱え垣根を越えて遁走した。

と、「幽絶」たる風情の「亭檻」にたまたま眼をとめた眞宗が使者を寄越すと、魏野は鶴に舞を教えているところだったという。仕官を嫌い、鶴に舞を教え、琴を抱えて逃げた隠士魏野の姿は、『夢溪筆談』の逸話にみえる林逋の神秘性には及ばぬものの、充分に風雅である。『古今詩話』の成書時期は、郭紹虞の説では北宋末だという。[16] 本條が事實を記録したものとは限らないが、北宋士大夫が、魏野を養鶴隠士として認めていたとは言えるだろう。

魏野はそもそも晩唐體の代表詩人だが、「皆　白樂天を宗とす」と言われた宋初において、彼も例外なく「其の詩　白樂天體を效ふ[17]」であった。日常の「小さな生活」の中の鶴を描くという点で、魏野の鶴へのまなざしは白居易のそれに酷似している。具體的な類似点を次に三つあげよう。

第一に、魏野は鶴を指して「閒伴」（「又次前韻兼乞鶴」詩）と呼ぶが、これは白居易の閑適詩に頻見する語で、「閑を共にし伴と作すは鶴に如く無し」（白居易「郡西亭偶詠」詩）などがある。鶴を自身の「閑」なる生活の「伴」とみなし、「閑」の空間を鶴と共有せんとする認識を、魏野は白居易から受け継いでいる。

第二に、鶴と自身が似ていると自認している。魏野が馮亞なる人物から鶴を贈られ、謝意を述べた詩にいわく、

情性渾如我　　情性　渾て我の如し
精神酷似君　　精神　酷く君に似たり
（魏野「謝馮亞惠鶴」詩、『全宋詩』巻八〇）

譲り受けた鶴からは、「我」（魏野）と「君」（馮亞）のそれぞれと似た部分を見出せるという。類似の表現は、劉小諫とのやりとりにもみえる。いわく、

毛比君情猶恐少　　毛は君が情に比べて　猶ほ少なきを恐れ
格如我性不争多　　格は我が性の如くにして　多きを争はず
（魏野「謝劉小諫寄惠雙鶴」詩、『全宋詩』巻八五）

鶴の「情性」「精神」や「毛」「格」に新舊の飼い主との類似性を見て取るこれらの詩句は、白居易の「素毛は我が鬢の如く、丹頂は君の心に似たり」（「劉蘇州以華亭一鶴遠寄以詩謝之」）を模倣している。風貌や精神が類似するとの表現は、父子の血縁關係が鶴と自身との間に存在しているかのようだ。鶴を子とみなす姿勢は、白居易から、（林逋にではなく）むしろ魏野へと受け繼がれたと言えるだろう。

第三に、鶴が主人を恋い慕う情景の描寫がみられる。魏野は、薛省判から譲り受けた鶴の様子を次のように詠う。

早輟仙禽寄逸民　　早に仙禽を輟（す）て　逸民に寄するも

年來亦似厭家貧　年來　亦た似たり　家の貧しきを厭ふに
時時東望長鳴處　時時　東望して長鳴する處
應憶朱門舊主人　應に憶ふべし　朱門の舊き主人を
（魏野「謝薛省判寄惠鶴」詩、五絶、『全宋詩』巻八五）

この鶴は、「凌雲之志」を持って大空へ飛翔せんとする意志を持たない。新しい主人（魏野）の貧乏暮らしに倦み（「厭家貧」）、以前の何不自由ない「朱門」の暮らしを「憶」って「長鳴」する。本來、仙禽は世俗の塵を嫌い、「朱門」を避けて「逸民」に心を寄せるはずだが、この詩の鶴はそうではない。「仙禽」としての神秘性は皆無であり、かつての主人（薛省判）への「情」を抱く、飼い馴らされた家畜である。拙稿[18]に論じたように、「野鶴」「舞鶴」「仙禽」として神秘的かつ耽美に描かれてきた鶴は、白居易に至って家禽として主人に親しむ姿が描かれるようになった。以上の三点において、魏野の養鶴詩は白居易のそれを踏襲している。

その他の養鶴する「山林詩人」にも触れておきたい。杭州は西湖孤山の瑪瑙禅院の僧、智圓（九七六-一〇二二）も、白體を学ぶ[19]養鶴詩人である。「庭鶴」詩（『全宋詩』巻一三六）では養鶴主として知られる支遁や衛の懿公を引きながら、鶴に「おまえ」（「君」「汝」）と親しく呼びかけ、「失鶴」詩（『全宋詩』巻一三八）では「庭」から飛び去った鶴を想って詠う。この二詩が智圓の實體験に基づいた作で、『全宋詩』の配列が編年であるならば、智圓は一羽の鶴を飼っていたが逃げられたことになり、その養鶴は一時的なものであったと判斷できよう。鶴を失ったあと、智圓は、「戲題四絶句　并序」（『全宋詩』巻一四一）を作った。この詩に登場する鶴は「野鶴」であって養鶴

ではないものの、白居易の「池鶴八絶句　并序」の影響が見られる。白居易は洛陽の邸宅の家禽五種を取り上げ、いっぽう智圓は家畜の鶏犬と山野の鹿鶴とを登場させた。都の士大夫と地方の僧侶という両者の環境の違いが鳥獣の種類に反映されている。

そもそも白居易が自邸で仙禽を飼い馴らしたのは、「官」と「隱」とを両立する「中隱」の一表現であろう。士大夫が、隱棲に對する憧れを世俗の市井で實踐したのが「中隱」である。隱士の魏野らが士大夫白居易の養鶴に影響を受けた養鶴詩を制作するのは、ある意味、隱棲への憧憬を〝逆輸入〟したものといえるのではないか。すなわち、隱棲の象徴ともいうべき養鶴を士大夫（白居易）がおこない、それを描寫した養鶴詩に、本物の隱士が影響を受けているわけで、隱棲に憧れた士大夫に憧れた隱士、という屈折した圖式を魏野らの養鶴詩から讀み取ることができる。士大夫白居易や白體を経由することによって、白體の隱士の養鶴詩は俗世の香りをほのかに身にまとい、隱逸の神秘性をみずからはぎ取っているのである。

五、北宋士大夫の養鶴環境

宋代の「文人」には、「必ずといってよいほど詩文のみならず、書畫音樂などの芸術とのかかわり」[20]が想定され、彼らの多くは文房四寶などの収集癖を発揮している。唐代士大夫の中には巨大な太湖石を蘇州から中原や關中まで運搬させるなど、北宋末・徽宗の花石綱を彷彿とさせる巨大な財力を蓄えた貴族も少なくなかった。それに對し、宋代士大夫の財力は唐代士大夫を大きく下回り[21]、「サラリーマン的」（岡本不二明氏）な生活を余儀なくされた。とくに北宋の士大夫は三年で任が満ちるたびに長距離の移動を強いられた。趣味品の小型化は、財力と轉任という彼

らの経常的な問題を反映している。

こと養鶴という観点に立った場合、北宋士大夫は、唐代や南宋の養鶴士大夫よりも不利な境遇に置かれていた。任地で入手した鶴を都開封や次の任地に帯同することは、運搬上の手間を差し引いても、鶴に多大なストレスを與えることになる。唐の白居易ですら、呉郡（蘇州）から持ち帰った鶴を洛陽の留守宅に預け、自身は次の任地に赴いた。中原は鶴の生息地江南から遠い。大運河を始めとする水路の整備によって、旅のかなりの部分を船によって移動することが可能になり、養鶴士大夫が郷里や次の任地に鶴を帯同することの障壁を低くしたが、それでも輸送の途次に鶴の繊細な首や翼を傷めて死に至らしめることがあった。

南宋士大夫は淮河以南の「半壁の天下」の屈辱に耐えたが、養鶴条件に限って言えば北宋を上回っている。國土の半減の對策として官吏を郷里に待機させる政策がとられ、士大夫のなかには人生の過半を郷里で過ごせる者もいたからである。たとえば陸游は四十二歳で隆興府（江西省南昌）通判を解かれ、帰郷してから四十年間、郷里で養鶴を續けた。養鶴は本來、貴族趣味であるから、轉勤族の北宋士大夫が養鶴環境を整備し續けるのは相當に困難であったと予想される。唐代や南宋の士大夫と比較すると、北宋士大夫は財力では唐代士大夫には及ばず、一箇所での定住期間は南宋士大夫に及ばない。北宋士大夫が養鶴を繼續するための環境は恵まれていたとは言いがたいのである。

よって、轉任は北宋の養鶴士大夫が放鶴するきっかけとなった。鶴を人に譲った例として北宋初の潘若沖が挙げられる。潘若沖は、鶴を隠士廖融に譲渡した詩や、廖融に宛てて鶴に思いを馳せる詩、さらに廖融と鶴が前後して死んだと知らされて歎く詩など、内容に繼續性を持つ養鶴詩三首を制作した[22]。詩によれば、潘は鶴を船に載せて任地から郷里に連れ帰り、上京に當たって廖融に譲渡したという。おそらくは鶴の産地に近い零陵県や揚州での在任

中に入手し、彼の郷里は廖融の住む南嶽衡山（湖南省衡陽）の近郊であろうから、江南の任地から船で長江を遡上し、洞庭湖を経て湘江に入って帰郷したと考えられる。鶴を手放した理由は詩中に語られていないが、帰郷の長旅が鶴に與えたストレスやダメージを見て取って、再度の長距離の移動を強いることを斷念したのではないか（衡山から都汴京までの船旅は、前回の移動距離の數倍になる）。

また、鶴の運搬によって生じる金銭的負担も、帯同を躊躇させる一因となったかもしれない。潘は知揚州着任當時には太子右贊善大夫[23]で官品は正五品下であった。趣味に身銭を投じる余裕もないわけではなかろうが、唐代士大夫のような、多くの下僕を連れた何不自由ない旅とは異なるものだったろう。

とはいえ、潘若沖のような下位士大夫の鶴はともかく、「朱門」（前出、魏野詩）の鶴はそれよりは過保護であった。とくに歐陽脩の周辺では養鶴の話題が散見する。次節では、歐陽脩にまつわる「朱門」の養鶴詩をとりあげる。

六、歐陽脩らの養鶴詩

歐陽脩（一〇〇七-七二）を中心とする文人集團の養鶴詩には、大別して二種の鶴が描かれている。一種は梅摯の飼う鶴、もう一種は歐陽脩の「廳」（役所）で飼われる鶴である。具體的に言えば、前者は、梅摯の「憶鶴」詩（散逸）に歐陽脩が答え、梅堯臣・劉敞・王珪が唱和する（文末の付表には載せないが、歐陽脩の「戯答聖俞」詩や梅堯臣「和永叔内翰戯答」詩も同じ題材を扱う）。後者の歐陽脩の役所の鶴を題材にした詩群は、劉敞「戯題歐陽公廳前白鶴」詩と劉敞「題歐公廳前兩鶴」詩である。以下、二項に分けて考察する。

（一）梅摯の鶴

梅摯（九九五-一〇五九。字は公儀）の鶴が士大夫集團の詩材となったのは、嘉祐二年（一〇五七）、六十三歳のことである。梅摯は、成都新繫（四川省新都）の人。天聖五年（一〇二七）に進士及第し、知昭州や通判蘇州、開封府推官、陝西都轉運使等を経て、嘉祐二年には龍圖閣学士・同知貢擧として禮部貢院で科挙の試験官をつとめるも、二年後に六十五歳で知河中府として没した。梅摯は詩作を好んだが、現存するのは『全宋詩』巻一七八の一巻のみで、養鶴詩も散逸しているため、梅摯の養鶴の様相は彼の周辺の人々の詩によってのみ知りえる。梅摯の養鶴を詠うのは、貢院での唱和詩群である。

貢院では、正月五日からの五十日間、歐陽脩・韓絳（子華）・王珪（禹玉）・范鎮（景仁）・梅摯の知貢擧五名と小試官の梅堯臣（聖俞）の計六名で唱和し、古律歌詩百七十餘篇三巻を制作した。そのうち、梅摯の鶴に關する作は、まず梅摯が當時飼っていた鶴を「憶鶴」詩に詠い、歐陽脩が「呈」しさらに「答」え、それに梅堯臣・王珪・劉敞が唱和した。なお、歐陽脩は白兔を飼育しており、二年前の至和二年（一〇五五）に「白兔」詩を制作していた。梅儀の「憶鶴」詩（散逸）を讀んだ歐陽脩は、七律「憶鶴呈公儀」詩を呈して養鶴主梅摯の「高潔なる胸懐」[24]に感じ入り、「君が雙鶴を誦す　句尤も清し」「心を物に累わすは豈に情に非ざらむや」と共感を寄せた。さらに歐陽脩は梅摯の同詩に答えて、梅の鶴と自身の白兔への想いを詠った戯れの作「思白兔雜言戯答公儀憶鶴之作」詩（全二十六句）を制作した。以下、この詩を取り上げたい。

詩の冒頭[25]、梅摯の飼う白鶴二羽と歐陽脩の飼う白兔は、それぞれ他者から「兩翁」に贈られたものだという。長壽の象徴である鶴や「仁獣」の兔は、しばしば老人への贈り物に用いられる[26]。梅摯が鶴を入手した経路や時期は不

明だが、同時期の梅堯臣の作「和公儀龍圖憶小鶴」詩には、梅摯の鶴が幼鳥として描かれている[27]ので、入手してまだ間もない頃だろう。いっぽう、歐陽脩の白兔はかつて滁州の人から贈られたもので、その養兔歴はすでに十年を超えている。禽獣はすっかり「野性」を失って主人に慣れ親しみ（「馴擾」）、主人もその「孤高」なる「仙格」を愛おしんでいる。そして、

玉兔四蹄不解舞　玉兔の四蹄　舞を解くせず
不如雙鶴能清**嗥**　如かず　雙鶴の清**嗥**を能くするに
低垂兩翅趁節拍　低く兩翅を垂れて　節拍を趁（お）ひ
婆娑弄影誇嬌嬈　婆娑として影を弄びて　嬌嬈を誇る

梅摯の二羽の鶴は、美しい鳴き声（「清**嗥**」）を響かせ、リズム（「節拍」）に合わせて翼を垂れて「舞」うこともできる。兔にはそんな藝當はできないので、鶴のほうがすばらしい、と歐陽脩は梅摯を持ち上げる。そして、

兩翁念此二物者　兩翁　此の二物を念ふ者なるも
久不見之心甚勞　久しく之を見ずして　心甚だ勞る

貢院にとざされて帰れない我々兩名は、家に残してきた「二物」を「念」うあまり、「心甚勞」の状態に陥った、と泣き言を述べる。詩はこのあと歐陽脩の妄想を描き始める。もし血気盛んな「京師少年」が兩家の籠をこっそり

開けて兔と鶴を逃がしてしまったら、兔は「滄海」か「明月窟」へ、鶴は「玉山千仞」か「青松巣」へと、それぞれ逃げてしまうだろう、そうなれば、玉山へ探しに行く力もない我々老人二人は悲嘆に暮れるしかない、と妄想し、「纖腰緑鬢」の美女への興味をすでに失っているのに、このうえ二物までも失うのは寂しい限りだ、と嘆いて詩を結ぶ。梅摯の詩が鶴への主人の「憶」いを吐露する内容であったため、歐陽脩はその「憶」いを誇張して主人の「心」を「甚だ勞」せしむるものとして描寫し、架空の「京師少年」の悪戯まででっち上げて杞憂するという戯れの詩を作った。

本詩に和した作を一つ紹介する。梅堯臣の和詩の最後の聯には、

我雖老矣無物惑　我　老ゆると雖も　物の惑ひ無く
欲去東家看舞姝　東家に去きて舞姝を看んと欲す

（梅堯臣「和永叔內翰思白兔答憶鶴雜言」詩、『全宋詩』巻二五八）

私はあなたたちのように外物に惑わされることはありません、と、「心甚だ勞」する二人を突き放している。梅堯臣は鶴（や兔）への感情を「物惑」と看做し、歐が既に失った「舞姝」（うたいめ）への關心を、自分はまだ失っていないぞ、と勝ち誇って詠う。もちろんこの詩も親友歐陽脩との気安い間柄ゆえの戯れの作である。歐は、梅摯の「憶鶴」詩に描かれる「憶」いは「清」らかで「高潔なる情懷」であるとして、梅摯が鶴という「物」に拘泥することへの理解を示していた（「累心於物豈非情」）。そのいっぽう、歐の「心甚勞」や梅堯臣の「物惑」は、戯詩の形をとりながらも、惑溺を戒めている。衛の懿公の鶴の厚遇が世の笑いものとなった故事が物語るように、本聯

には、「心甚だ勞る」（歐詩）に至るほどの過度の情を「物」に對して持つのは滑稽だ、という中國士大夫の傳統的な認識が見え隱れする。いずれにせよ、彼らの一連の養鶴詩は梅摯の鶴への「情」を主眼にした作であり、彼らの養鶴詩は“鶴への情を詠う”という点において白居易や魏野の流れを汲んでいると言えるだろう。

さて、梅摯はみずから養鶴するばかりでなく、文彦博（一〇〇六–九七）に華亭の鶴を贈った。文彦博は仁宗から哲宗までの四代に仕え、潞國公に封ぜられた朝廷の重鎮である。文彦博の「梅公儀見寄華亭鶴一隻」詩（『全宋詩』巻二七四）の第二句に、「遠く仙禽を寄せ洛城に至る」ということから、文の洛陽滞在中の嘉祐三年（一〇五八）――貢院での唱和詩制作の翌年で、梅摯の亡くなる前年――が制作時期であろう。この時、梅摯は知杭州となって江南に移り、華亭鶴を入手しやすい環境にあったし、文彦博は判河南府となって潞國公に封ぜられて洛陽にいた。文彦博は詩の頸聯に、

稲粱猶憶嘉禾美　稲粱　猶お憶ふ　嘉禾の美なるを
竹樹應憐履道清　竹樹　應に憐れむべし　履道の清なるを
（文彦博「梅公儀見寄華亭鶴一隻」詩『全宋詩』巻二七四）

とうたい、自注に「樂天《池上篇》に云ふ、華亭の鶴二有りと。」という。この聯で鶴は、餌（「稲粱」）は梅邸のほうが美味で、庭（「竹樹」）は文邸のほうが清廉で良いと感じている。「嘉禾」は嘉興（現浙江）の古名で梅摯の居場所を指し、「履道」は自注にいうとおり白居易の舊宅のあった場所で、本詩では文彦博の洛陽の家を指す。鶴が新舊の環境を比較するという描寫は魏野の養鶴詩（前出）にもみえるが、魏野の鶴は士大夫の「朱門」から隱士

の家に來て、以前の恵まれた環境を懐かしむばかりであった。文彦博詩では、ここはかの白居易ゆかりの洛陽なのだから、鶴も「清」なる環境に満足しているはずだ、と新主人は自信を滲ませている。文彦博はかつてこの洛陽で鶴を飼っていた白居易を念頭に置いて養鶴を始めんとしている。贈り主の梅摯が文彦博に鶴を贈った経緯は不明だが、梅摯も白居易の養鶴を意識していたにちがいない。

王水照氏ら[28]の論考に詳述されるように、洛陽は北宋文人にとって特別な都市であり、とくに白居易との關連が深いことも彼らの洛陽への印象を強くしている。文彦博はのちの元豊五年（一〇八二）、七十七歳の時に、白居易の「九老會」に倣って「耆英會」を作った（司馬光「洛陽耆英會序」）し、さかのぼれば天聖九年（一〇三一）、洛陽留守錢惟演（九七七-一〇三四）も、若き歐陽脩や梅堯臣らと「洛中七友」や「八老」を結成して白居易の故居に遊び、「九老」の畫像のそばに自分たちの姿を描き添えた。洛陽には「天下第一」と稱されるほど數多くの園林があり（『邵氏聞見後録』巻二十四）、その中には白居易や裴度の庭園も含まれていた。これらの庭園や名山を有する洛陽は、破壊されることなく次の王朝へと譲られ、後漢から北宋までの千年間、文人たちの遊興と創作の場であり續けた。北宋文人たちは、洛陽に遊べば過去の文学者――とくに白居易の息づかいを感じることができた。白體の影響を受けた彼らにとって、洛陽での養鶴は白居易への追慕に等しい。白居易や白體への憧憬は、北宋士大夫の養鶴の原動力となったのではないか。

（二）「歐公廳前」の鶴

歐陽脩と親密な關係であった劉敞（一〇一九-六八）「戲題歐公廳前白鶴」詩と、その弟劉攽（一〇二三-八九）「題歐公廳前兩鶴」詩によれば、「歐公」の「廳前」で二羽の白鶴が飼われていたという。『全宋詩』の他の詩例からみ

ても、「廳前」はおそらく役所の前庭である。[29] 役所というオフィシャルな場所での養鶴であるが、劉敞詩の題下の自注に、「歐云ふ、此の鶴　寒を畏れ，常に屋中に之を養ふと」、鶴が寒さを嫌うので屋内で飼っていると歐陽脩が述べたと紹介しており、弟劉攽詩の冒頭にも、「明公」（歐）はみずから良い鶴を選別して入手したと詠う。すなわち劉兄弟詩によれば、廳前での養鶴は歐陽脩の主導で始められたものであり、歐陽脩に養鶴趣味があったことを示唆しているのだ。ただし、こう斷言するには疑問が残る。歐陽脩の養鶴趣味に關する文獻が、劉詩以外に見受けられないのである。歐陽脩自身に、養鶴を描いた作品は現存しない。歐陽脩は自身の愛好する兔や牡丹の詩は作っていたのだから、養鶴に對するこだわりを持っているのならそれをまったく詠わないのは不自然であろう。また、歐陽脩の親友梅堯臣も、貢院での作のなかで、

我聞二公趣向殊　　我聞く　二公　趣向　殊なれるを
一養月中物　　一は養う　月中の物
一養華亭雛　　一は養う　華亭の雛
（梅堯臣「和永叔内翰思白兔答憶鶴雜言」詩、『全宋詩』巻二五八）

と、梅摯と歐陽脩の嗜好は異なっており、梅摯は鶴、歐陽脩は兔を飼っていると証言している。嘉祐二年（一〇五七）正月の時点での歐陽脩は、まだ養鶴の「趣向」を持っていないので、劉兄弟詩はそれ以降の作ということになるが、そうであっても、歐陽脩に自身の養鶴についての言及がないことを説明できない。よって、歐陽脩自身の養鶴である可能性は至って低いと判斷せざるを得ない。では誰の鶴なのか。

じつは、劉徳清氏の『歐陽修詩編年箋注』は、歐陽脩の「戲答聖俞」詩の題解[30]に劉敞の當該詩を引いている。「戲答聖俞」詩は嘉祐二年正月の貢院での唱和詩群の一首で、梅摯の鶴を題材とする。劉徳清氏は具體的な説明こそしないものの、劉敞詩と歐陽脩の貢院唱和詩群との關連を示唆しているのである。劉徳清氏が示唆するように、劉敞詩が貢院での梅摯の「憶鶴」詩に端を発した歐陽脩と梅堯臣の應酬詩、すなわち、歐陽脩の「思白兔雜言戲答公儀憶鶴之作」詩（前出、歐詩Aとする）、梅堯臣の「和永叔内翰思白兔答憶鶴雜言」詩（前出、梅詩Bとする）、そしてとりわけ歐陽脩の「戲答聖俞」詩（歐詩Cとする）に關連した作品[31]であるならば、歐詩Cと劉兄弟詩とを比較する必要があるだろう。歐詩Cは梅詩Bに答え、AB両詩に引き續き、鶴と白兔という風雅な「二物」を題材にした作である。まずは、歐詩Cの鶴に關する部分のみを次に引く。

鶴行而啄　　鶴行きて啄み
青玉觜　　青玉の觜
枯松脚　　枯松の脚
・・・（中略）・・・
往往於人家高堂静屋曾見之　　往往にして　人家の高堂静屋に曾ち之を見れば
錦装玉軸掛壁垂　　錦装　玉軸　壁に掛かりて垂る
乍見拭目猶驚疑　　乍ち見て　目を拭き　猶お驚疑す
羽毛襂褷眼晴活　　羽毛　襂褷にして　眼晴　活く
若動不動如風吹　　動くが若くにして動かず　風の吹くが如し

主人矜誇百金買　主人　矜誇す　百金もて買ひ
云此絶筆人間奇　云う此れ　絶筆　人間の奇なりと
畫師畫生不畫死　畫師　生を畫くも　死を畫かず
所得百分三二爾　得る所　百分に三二なる爾
豈如翫物翫其眞　豈に物を翫(もてあそ)ぶに如(し)かんや　其の眞を翫ぶは
凡物可愛惟精神　凡そ物　愛すべきは惟だ精神のみ
況此二物物之珍　況んや　此の二物　物の珍なるをや
月光臨静夜　月光　静夜に臨み
雪色凌清晨　雪色　清晨を凌ぐ
二物於此時　二物　此の時に於いて
瑩無一點纎埃塵　瑩として一點の纎き埃塵　無し
・・・（後略）・・・
（歐陽脩「戲答聖兪」詩、『全宋詩』巻二八七）

大意[33]は次のとおりである。往々にして「高堂静屋」の壁には立派に表装された鶴（と兔）の絵畫が飾られているものだ。その眼や羽毛は生きているかのようで、今にも動き出しそうである。主人は大枚をはたいて買い取り、名作だと自慢する。だが、絵師の力には限界があり、ほんのわずかしか描き出せないので、絵姿（「眞」）を愛でるよりも實物を愛でるほうがよい。物において重要なのは精神だけであり、二物（鶴と兔）は物のなかでもとりわけ珍

品である。月の輝く夜や雪の降る朝には二物の輝きは際立ち、少しの汚れも見られない、という内容である。

歐陽脩は絵畫のたとえを出して、名畫であっても實物には敵わないし、その中でも鶴と兔は別格であるとする。さらに、先の梅詩Bの最後の聯を受けて、きみ（「詩老」、すなわち梅堯臣）は私（「醉老」、すなわち歐陽脩）が兔と鶴とをめで可愛がるのを笑うが、きみこそ「舞姝」に相手にされまいよ、とあざ笑って詩を結ぶ。歐詩Aでは、鶴は梅摯のもので、兔は歐陽脩のもの、と所有者が區別されていたが、應酬をかさねた歐詩Cでは梅摯の存在は消され、「二物」を愛する歐陽脩と「舞姝」を愛する梅堯臣、という単純かつ明解な構圖になっている。歐陽脩は自身を「二物」の主人へと改變し、梅摯の言い分をも肩代わりして梅堯臣に反論したのである。

では、次に劉敞・劉攽兄弟による養鶴詩を挙げよう。

劉敞「戲題歐公廳前白鶴」詩　自注：歐云此鶴畏寒，常于屋中養之。

明公雙鶴未易知　明公の雙鶴　未だ知り易からず
志在赤霄萬里外　志は赤霄　萬里の外に在り
低頭啄泥不自聊　頭を低れ　泥を啄みては　自ら聊(たの)しまざるも
拊翼向人幾可愛　翼を拊(う)ち人に向かひては　愛すべきに幾し
北風崩雲三尺雪　北風　雲を崩す　三尺の雪
側睨天池頗愁絶　側めて天池を睨みて　頗る愁絶
不忍鳧雁争稻粱　忍びず　鳧雁の稻粱を争ふに
誤譏燕雀附炎熱　誤まりて譏る　燕雀の炎熱に附すを

答公厚意終一飛　公の厚意に答へて終に一たび飛べば
萬人仰首公看之　萬人　首を仰げて　公も之を看ん
（『全宋詩』巻四七八）

劉攽「題歐公廳前兩鶴」詩
明公眞愛鶴　明公　眞に鶴を愛で
相鶴選仙骨　鶴を相て　仙骨を選ぶ
遂令千金姿　遂に千金の姿をして
爲君軒墀物　君が軒墀の物爲らしむ
啄腥豈復辭雞群　腥を啄めば　豈に復た雞群に辭せむ
鍛翼欲比鳧鷖馴　翼を鍛れば　鳧鷖の馴るるに比せむと欲す
聆音發舞似矜客　音を聆き舞を發すれば　客に矜るに似
避寒孤警將依人　寒を避けて孤り警けば　將に人に依らむとす
吾聞芝田逸翮不如此　吾聞く　芝田の逸翮　此に如かずと
世上悠悠誰識眞　世上　悠悠たるも　誰か眞を識らむや
（『全宋詩』巻六〇五）

詩題の「歐公」や詩句の「明公」は歐陽脩を指す。「廳前」の語は、役所の前庭を指し、私邸の意では用いない。

弟劉攽詩の冒頭四句によれば、歐は鶴を非常に好み（「明公眞愛鶴」）、吟味して良い鶴を選び（「相鶴選仙骨」）、大枚をはたいて（「遂令千金姿」）、役所に迎え入れ（「爲君軒墀物」）たという。「軒墀」は富貴の家の廳堂で、ここでは歐の役所を指す。劉攽は第五句以降、鶴が「雞群」や「鳧鶩」に馴れ、その舞や鳴き声で主人や客をを娯しませるなどして、主人に親しむ様子を描く。兄劉敞の描く鶴は、「凌雲之志」を抱き、「天池」を想って「愁」えつつも、「公厚意」に感謝している。

歐詩Cと劉兄弟詩とに共通する表現をまとめると、次の表のようになる。

歐陽脩詩C	劉敞詩	劉攽詩
人家高堂靜屋	廳前（屋外）／屋中	廳前
主人矜誇百金買		明公眞愛鶴、相鶴選仙骨。 遂令千金姿、爲君軒墀物。
若動不動如風吹		聆音發舞似矜客
翫其眞		識眞
雪色	三尺雪	

歐詩Cで鶴の絵が飾られるのは室内（「高堂静屋」）で、劉兄弟詩は詩題では屋外（「廳前」）というが、劉敞の自注には「屋中」で飼われているとわざわざことわっている。大金で購入されたのは、歐詩Cでは鶴畫であり、劉攽詩では生きた鶴だという。歐詩Cの鶴畫の、風の吹くが如き羽ばたきの描寫は、劉兄弟の詩では観客を魅了する美しい舞として描かれているし、「眞」の語は、歐詩では絵姿の意であるが、劉攽詩ではまことの姿の意で使われている。歐詩Cで鶴の清らかさを際立たせた雪景は、劉敞詩では鶴の「愁」の寓意として取り入れられている。すなわち、劉兄弟詩は歐詩の語彙を踏襲しつつも、歐詩とは異なる意味合いで用い、自身の創作に生かしているのである。劉徳清氏が歐詩Cの題解のなかで劉敞詩を引いたのは、劉兄弟の創作が歐詩Cを下敷きにしたものであることを言いたかったのではないか。

では劉兄弟詩の鶴はいったい何なのか。養鶴の場が「廳前」という公的機關であれ、かりに歐陽脩が主體的に鶴を選んで購入するほどの強い關心を鶴に對して持っていたのなら、「養鶴記」等の記録を残したはずではないか。劉兄弟詩のほかに歐陽脩の養鶴を裏付ける文献がない以上、劉兄弟の戯詩に描かれる歐の鶴への情愛は創作であり虚構であると判斷せざるをえない。すなわち歐陽脩は養鶴していなかった。劉兄弟詩に描かれた鶴は、生身の鶴を観察したものではない。では何か。畫鶴ではないか。「高堂静屋」には「往往」にして本物そっくりの「二物」の絵畫が「掛」けられているものだ、という歐詩のたとえが、劉兄弟によって室内での養鶴へと改變され、すなわち架空の養鶴が「戯」れに作り出された、と考えるのが合理的ではないか。實際には養鶴していないのだから、歐の養鶴に關する記述が他の文献にみられないのは當然である。劉敞は自注に「歐云」といい、歐陽脩から聞いた話とすることによって眞實味を補い、歐陽脩の養鶴が事實かと讀者に錯覚させた。實際に歐陽脩は、壁の鶴畫を前に、「うちの鶴は寒がりなので室内に置いているのですよ」と冗談を言ったかもしれない。劉兄弟、とくに弟の劉攽は

諧謔を善くしたことで知られる。劉攽詩の冒頭の、歐陽脩が鶴を入手する場面の描寫も、兄劉敞が養鶴主「歐公」を自注に記したのも、彼ら一流の諧謔であり虚構である。兎が劉兄弟の詩から揃って省かれているのは、歐陽脩の養兎は事實だからだ。事實を省くことによって、純然たる虚構の作になる。もとは梅摯の鶴を憶う詩から始まり、歐陽脩や梅堯臣、そしてふたたび歐陽脩へと戯れの應酬を経て、劉兄弟に至っては歐陽脩の養鶴が捏造されることとなった。すなわち虚構の養鶴詩である。とはいえ、自身を「二物」の主人へと作り替えた歐詩Cの虚構こそが、劉兄弟の虚構を誘発する“起爆剤”となったと考えられよう。

廳内の鶴の絵といえば、唐の書畫家薛稷（六四九-七一三）の逸話が想起されよう。薛稷は鶴をよく描いたことで知られ、彼の絵に賀知章が詩を題した壁畫が、東祕書廳の壁に遺されていた[34]ことから、祕書省は「畫鶴廳」と呼ばれた。本詩で「歐公廳」に鶴畫が飾られていたのも事實なのではないか。畫鶴廳の名にたがわず、役所内に庭鶴の絵が飾られていたのを、劉敞詩の自注は寒がりの鶴を屋内で飼っていると、戯れにそう言い表したのではないか。劉兄弟詩の制作時期は不詳ではあるが、歐陽脩が祕書省で劉敞とともに編纂に携わった『新唐書』が完成をみたのは嘉祐六年、すなわち貢院唱和の四年後であったから、劉敞は史書編纂作業の合間に祕書省の鶴畫を目にとめ、貢院唱和詩に啓発されて本詩を制作した、との推測がなりたつのではないか。

劉兄弟詩の他の詠鶴表現と比較してみると、弟劉攽の五律「畫鶴」詩の内容[35]とよく似ている。富貴の家に引き取られた鶴が主人の寵愛を受け、庭の衆鳥に混じって暮らし、尾聯で仙界に想いを馳せるというもので、詠鶴詩の定型ともいえる展開である。おそらくいずれの作も、養鶴の實體験や實景に據らずに想像のみで制作されたのではないか。

また、歐陽脩の七絶「鶴」詩[36]は、人に飼われる鶴を描いた、嘉祐三年（一〇五八）秋の作である。籠に閉じ込め

られ（「樊籠」）、うな垂れて疲れ切って（「低摧」）いる鶴の、大空に飛び立たんとする志（「天外意」）が描かれ、歐の人生の寓意だと解されている。[37] もしかすると、歐陽脩が養鶴しなかった理由は、ここにあるのかもしれない。「天外意」を持つ鶴に、自身と同じ「樊籠」の環境を強いることを快しとしなかったのではないか。

劉兄弟や歐陽脩の養鶴詩の鶴像は、魏野や白居易のそれとはやや趣が異なっている。白居易以來、養鶴詩には、衆鳥と交わらずに「閑」立する鶴が描かれ、さらにその姿に共感をおぼえた主人の「伴」となる鶴が描かれてきた。さきに見たように、魏野ら白體詩人にはその特徴が濃厚にみられた。それに對し、劉兄弟の養鶴詩や、さらに前節の梅摯の鶴を詠った歐陽脩らの養鶴詩に描かれるのは、六朝以來の鶴詩に描かれてきた、「舞」や鳴き声で主人を魅了する美麗な姿である。養鶴詩を制作した歐陽脩や梅堯臣、劉兄弟のいずれも養鶴経験をもたないのだから、定型表現にとどまるのはやむを得ないことではある。とはいえ、仁宗期（在位一〇二二-六三）の士大夫の多くが平易な白體を慕うなかで、[38] 歐陽脩は韓愈を崇拝し、[39] 白居易についての言及が少ない。劉兄弟の詩風も韓愈や歐陽脩のそれに近い。歐陽脩らは宋初を席卷した西崑體の非現實感を批判し、簡潔に現實を描寫することを主張したが、彼らの描くのは舞い鳴く傳統的な鶴であり、主人の「厚意」（深い情愛）と鶴の應「答」という主従關係であった。彼らが養鶴に求めたのは華麗なる「千金姿」であって、「伴」ではなかったということになる。裏を返して言えば、歐らは養鶴に對して定型表現を破るほどの強い關心や洞察を持っていなかった。彼らにとって養鶴は貢院唱和の題材であり、創作遊戯の契機の一つであったといえよう。

七、寓意の養鶴詩「鶴嘆」――結びに代えて――

北宋の代表的文人といえば、本稿で取り上げた歐陽脩のほかに、蘇軾や蘇門四学士、また江西詩派の詩人たちが[40]挙げられるが、彼らの作品からは養鶴をうかがわせるものは確認できなかった。彼らの周辺に養鶴趣味が存在しなかったわけではなく、蘇軾の「鶴歎」詩は飼われる鶴の嘆きを主題としている。私見では、この詩は劉禹錫・白居易の應酬にアイディアを得ていると思われる。さいごに、この「鶴嘆」詩の變遷を取り上げて本稿の結びとしたい。

創始の「鶴嘆」詩では、白居易が呉郡（蘇州）から持ち帰った二羽の鶴を洛陽の留守宅に置いていたところ、そこを訪れた劉禹錫が鶴の「似含情顧慕填膺而不能言者」として鳴く様子を見、「鶴嘆」詩を作って白居易に贈り、白居易もそれに應えたもので、白居易に飼われる鶴が主題である。そして、

寂寞一雙鶴　寂寞たり　一雙鶴
主人在西京　主人　西京に在り
（劉禹錫「鶴歎二首　其一」、『全唐詩』巻三五七）

というように、鶴の「嘆」きの理由は主人の留守による「寂寞」である。劉禹錫は目の前の景を描いたにすぎず、そこに特別な寓意は認められない。

管見の及ぶ範囲では、白居易・劉禹錫のあと、「鶴嘆」詩はしばらく作られず、二百年後に、北宋の蘇軾（一〇三七

一一〇一）と賀鑄（一〇五二―一一二五）に至ってようやく第二の作例が現れる。南宋では、白玉蟾（一一三四―一二二九）一人にあるのみである。だが、蘇軾と賀鑄は自身では養鶴しておらず（道士白玉蟾は養鶴した）、蘇軾は「園中」の鶴を、賀鑄は「海陵蘇氏」の鶴を、すなわち第三者所有の鶴を主題とする。そして、いずれも鶴が一人称で語り、不遇を歎いているのである。

蘇軾の「鶴歎」詩は、前漢・賈誼の「鵩鳥賦」をふまえて作られた。鵩鳥はフクロウに似た鳥で凶兆とされる。賈誼は流謫先の長沙で家に入ってきた鵩鳥を見て、余命の長くないことを悟ったが、本詩で蘇軾のもとに飛來したのは仙禽の鶴である。鵩鳥が賈誼に「臆」（胸中）の事を傳えたように、鶴は蘇軾に「我生如寄良畸孤」と語り始めるが、「我生如寄」は蘇軾が繰り返し主張してきたことばでもあるので、鶴には蘇軾自身が投影されていよう。鶴は人に馴れているものの、「俯啄少許便有餘、何至以身爲子娛」と言って、「投」じられた「餅餌」には目もくれず、蘇軾のために「娛」樂を提供することを拒否し、「畸孤」（世俗に流されずに獨立する人）として儒者のあるべき姿を示す[41]。

賀鑄の「老鶴嘆」詩では、序にいうとおり、「海陵蘇氏」の庭の池は干上がり、鶴は餌も與えられずに餓死寸前である。その「嘆」きは、劣悪な待遇への怒りと悲しみであり、鶴は「嗚呼、衛侯既不可作、道林今也則無」と、衛の懿公や支遁のような庇護者を求めて歎き叫ぶ。賀鑄は賀知章の末裔で、太祖の賀皇后一族の出である自身を鶴になぞらえたと考えられる。だが、それだけだろうか。じつはこの二詩の制作時期は近く、蘇軾詩は元佑八年（一〇九三）冬、定州（河北省）での作で、賀鑄詩はその翌紹聖元年（一〇九四）[42]の作とされる。二つの鶴歎詩は一年のうちに相次いで作られたことになり、蘇軾に啓発されて賀鑄が作ったと考えるのが自然ではないだろうか。

二詩の制作時の状況を確認すると、紹聖元年、四十三歳の賀鑄は、かつて彼を推挙した蘇軾が定州から英州（広

東省）に左遷されることを四月に知った。そして翌五月[43]には、「聞蘇眉山謫守英州」詩を作って賈誼の「鵩鳥賦」を引いている[44]。賈誼のいた長沙（湖南省）は蘇軾の流謫先の英州から離れており、賀鑄は英州という地名から「鵩鳥賦」を連想したとは考えにくい。賀鑄は五月の時点ですでに、蘇軾の「鶴歎」詩を（蘇軾から送られるなどして）讀み知っており、その返歌として「老鶴嘆」詩を作ったのであろう。つまり、蘇軾の「鶴歎」詩と賀鑄の「老鶴嘆」詩は、ともに蘇軾の英州左遷に際して作られた、寓意を目的とした作品である。賀鑄は豪放と慎重とをあわせもち、阮籍をほうふつさせる人柄であったという[45]から、蘇軾の左遷に對する同情と義憤とを、蘇軾と同姓の「蘇氏」の鶴の嘆きという形で表明した可能性が大きい。とまれ、蘇軾は賈誼詩の野性の「鵩鳥」を養鶴へと改變した。蘇軾がもし眼前の實景を描いたのであれば、養鶴には不向きなはずの、冬の定州においても養鶴が行われていたことを實証しているし、寓意の作ならば、養鶴が詩材に選ばれるまでほどにすでに普及を見ていたことを實證していることになるだろう。

最後に、北宋養鶴詩の特徴をまとめておきたい。

北宋の詠鶴詩の中には、飼われる鶴か野鶴かの判別がし難いものも少なくない。唐代までは、詠鶴詩といえばすなわち野鶴を詠うのが定型であったが、北宋の詠鶴詩の中には飼われる鶴を題材にしたとおぼしき作品が散見する。北宋詩人が人に飼われる鶴を目にする機會が増え、實際にその姿に詩情を掻き立てられたのかもしれないが、籠の鶴が詠鶴表現の新たな定型になりつつあった。

北宋養鶴文人の憧憬の對象は、中唐の白居易であり、なかでも白體を学ぶ詩人や洛陽に遊ぶ士大夫は白居易の養鶴に憧れ、模倣せんとした。特徴的なのは隱士の魏野、そして歐陽脩を中心とする士大夫集團である。隱士は鶴を

自身の隠棲を彩り、風雅と神秘性を強調する形象として身近に置いた。そのなかで、魏野には白居易の影響が強く見られ、風雅な隠棲のなかで、人間くささすら感じられる白俗の養鶴詩を描いた。

士大夫は北宋においては三年ごとの轉任が課せられ、長期間の養鶴が隠士に比べて難しい。北宋士大夫の経済状況は唐代のそれには及ばないし、定住期間や環境は南宋士大夫には及ばない。にもかかわらず彼らが養鶴をおこなうのは、隠棲を市井で實現せんがためであり、あるいは文彦博のように白居易の洛陽の養鶴を再現したいがためである。そして、養鶴の樂しみを集團で共有し、創作意欲を掻き立てる詩材とした。實際の養鶴體験を詠った作品だけでなく、寓意や虚構による養鶴詩も出現した。なかでも虚構の養鶴詩は、養鶴趣味が普遍的になっていてはじめて出現する。

本稿では養鶴主を隠士と士大夫とに分けて考察したが、「隠」と「吏」の境界を行き來する者は少なくない。隠棲に憧れる士大夫は多いが、隋唐以降、任官を拒絶する純然たる隠士は減少の一途を辿り、隠士としての名声によって出世をもくろむ、いわゆる「身は江湖の上に在るも、心は魏闕の下に游ぶ[46]」という似非隠士が増加した。幽棲する隠士と、栄達に励む士大夫は必ずしも相容れない關係ではなくなったのである。隠士魏野が眞宗に招聘されたのも、そういった世相が背景にあってのことである（魏野は心底から仕官を嫌って逃亡したが）。鶴は、隠棲に憧れる（あるいは憧れる振りをする）北宋士大夫にとって、自邸で隠棲を仮想體験する貴重なアイテムであったが、隠棲をまさに實行している隠士文人にとっても、鶴は「家貧」（魏野詩）に風雅な趣を添える重要なアイテムであった。

養鶴主たちは「凌雲之志」を内に秘める鶴に自らを重ね、共感を寄せ、自身の姿を投影し、「伴」あるいは「子」のように愛でた。「凌雲之志」に共感を寄せるといいながらも、彼らは鶴から飛翔能力を奪い、「凌雲之志」を實現

不可能にさせているわけであるから、養鶴とは本來的に自己矛盾に充ち満ちた行爲でもあった。養鶴の先人、支遁はその矛盾を看過できずに鶴を空に放ったが、多くの養鶴主はこの矛盾には目をつぶって養鶴を續けた。同時代の隱士林逋の神秘的な養鶴傳説を、『夢溪筆談』傳播以前の彼らは知り得なかったから、北宋文人の養鶴はむろん林逋への憧憬を動機とはしていない。あたかも梅堯臣が「物に惑わされる」と皮肉ったように、彼らは鶴の容姿や美声そしてその典雅な風格に魅了され、この矛盾に充ち満ちた行爲を営々とつづけたのであろう。

1 荒井健氏ら訳『長物志1』（二六四頁、平凡社東洋文庫、一九九九年）

2 『長物志1』「解説」（荒井健氏ら訳注、平凡社東洋文庫、一九九九年）

3 坂井多穂子「白居易と鶴」（『奈良女子大学人間文化研究科年報』第十三号、一九九八年）、同「中國士大夫與作爲寵物的鶴」（『中國典籍與文化』全國高等院校古籍整理研究工作委員會　北京大学中文系同誌編集部編　二〇〇〇年第一期）、同「南宋の養鶴詩人――江湖詩人に至るまで――」（『江湖派研究』第四集　二〇一九年七月）、同「林逋と鶴――『梅妻鶴子』弁――」（『飈風』第五十九・六十合併號、飈風の會、二〇二〇年十一月）。

4 坂井多穂子「林逋と鶴――『梅妻鶴子』弁――」（『飈風』第五十九・六十合併號、飈風の會、二〇二〇年十一月）。

5 卷十に、「林逋は杭州孤山に隱棲し、常に鶴二羽を飼っていたが、放つと雲の彼方に飛んで行き、長い間飛び回ってから、ふたたび籠の中へと戻った。逋はよく小舟を浮かべて、西湖の諸寺に遊んだ。客が逋の住まいを訪れると、童子が出て應對し、客を部屋に引き入れ、籠を開けて鶴を放った。しばらくすると、必ず逋が小舟に棹さして帰ってきた。おそらく鶴の飛ぶ姿を合圖にしたのだろう。逋は高逸倨傲にして、学識豊かであったが、棋だけは指せなかった。つねに人に

こう言っていた。『私は世間の事は何でもできますが、肥え桶を担ぐのと碁を打つのだけはいけません。』」という。

6 鶴を主題としない作品をも網羅して調査すれば、さらに多くの養鶴主を抽出できる。たとえば魏野「書逸人兪大中屋壁」詩（『全宋詩』八三）には、「洗硯魚呑墨、烹茶鶴避煙」と、隱士兪大中の飼う鶴を詠う。

7 坂井多穂子「南宋の養鶴詩人――江湖詩人に至るまで――」（『江湖派研究』第四輯、二〇一九年七月）

8 沈重『毛詩義疏』（『漢魏遺書抄』所収）に、「呉人園中及士大夫皆養鶴」という。

9 楊億著・王仲犖注『西崑酬唱集注』（上海書店出版社、二〇〇一年）

10 たとえば、「飛舞長親十二樓」（任隨）など。

11 『宋詩概説』「第一章　第二節」（第六八頁、吉川幸次郎著、岩波書店中國詩人選集、一九六二年）

12 『四庫全書総目提要』巻一五二に、「野與林逋同時，身後之名不及逋裝點湖山，供後人題詠，而當時則聲價出逋上」という。

13 司馬光『温公續詩話』（『歴代詩話』、中華書局、一九八〇年）

14 『宋史』巻四五七「隱逸上　魏野傳」に、「野爲詩精苦，有唐人風格，多警策句。所有草堂集十卷，大中祥符初契丹使至，嘗言本國得其上帙，願求全部，詔與之」という。

15 李頎『古今詩話』（『宋詩話輯佚』上册、郭紹虞輯、中華書局、一九八〇年）。

16 郭紹虞『宋詩話考』（中華書局、一九七九年八月）は、『詩話総亀』や『苕溪漁隱叢話』に引用されていることから北宋末の成書だと推定している。

17 司馬光『温公續詩話』（『歴代詩話』、中華書局、一九八〇年）

18 坂井多穂子「白居易と鶴」（『奈良女子大学人間文化研究科年報』第十三号、一九九八年）

19 たとえば、「於鑠白樂天、崛起冠唐賢」（釋智圓「讀白樂天集」詩、『全宋詩』巻一三九）。

20 村上哲見『中國文人論』「文人・士大夫・讀書人」（第四六頁、汲古書院、一九九四年）

21 衣川強「宋代の俸給について――文臣官僚を中心として――」（『東方学報』第四一号、一九七〇年）、同「官僚と俸給―

―宋代の俸給について續考――」（『東方学報』第四二号、一九七一年）、また岡本不二明「筆記小説からみた宋代士人の金銭感覚と経済状態」（伊原弘編『宋銭の世界』、勉誠出版、二〇〇九年）など。

22 潘若沖の現存作品五首のうち、四首は南嶽衡山の隠士廖融に關連する作である。鶴を廖融に贈り（「留鶴贈廖融」詩）、南嶽で鶴と暮らす廖融に手紙を寄せ（「寄南嶽廖融」詩）、南嶽から來た客から廖融と鶴が相次いで没したことを知らされ（「聞融與鶴相繼而亡感賦絶句詩」）、彼の死を悼む（「哭廖融」詩）、というように、内容に連續性がみられる。

23 『宋人傳記資料索引』（第五冊三六四二頁、鼎文書局、中華民國七十七年增訂二版）には、「太平興國六年以右贊大夫知揚州、官終桂林守」と記す。

24 劉德清・顧寶林・歐陽明亮箋注『歐陽修詩編年箋注』「憶鶴呈公儀」詩の「題解」に、「詩歌借詠白鶴讃揚梅摯的高潔胸懷、表達景慕心儀之意。」という。

25 「君家白鶴白雪毛，我家白兔白玉毫。誰將贈兩翁，謂此二物皎潔勝瓊瑤。已憐野性易馴擾，復愛仙格何孤高。」

26 たとえば、文彦博の「依韻謝運使陳虞部生日惠雙鶴靈壽杖　四首」（『全宋詩』巻二七六）等。

27 「聞憶華亭雙鶴雛、蒼毛未變頂微朱」。

28 王水照『王水照自選集』（上海教育出版社、二〇〇〇年）の「北宋洛陽文人集團的構成」「北宋洛陽文人集團與地域環境的關係」「北宋洛陽文人集團與宋詩新貌的孕育」や、中尾健一郎氏『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、二〇一二年）等に詳しい。

29 たとえば、王禹偁「和張校書呉縣廳前冬日雙開牡丹歌」（『全宋詩』巻六八）、岑象求「詠縣廳前古櫧木」詩（『全宋詩』巻九〇九）など。

30 劉德清ら前掲書の「戲答聖俞」詩「題解」（第一三一五頁）による。

31 この他に、歐詩Cに梅堯臣が和した「和永叔内翰戲答」詩（『全宋詩』巻二五八）もある。

32 「静屋」は、『歐陽脩詩文集校箋』居士集巻六（上海古籍出版社、二〇〇九年）では「淨屋」に作る。

33 劉徳清氏らの注釈（前掲書一三一六頁）に據って解釈した。
34 『歴代名畫記』巻三「記兩京外州寺観畫壁・西京寺観等畫壁・祕書省」に、「薛稷畫鶴，賀知恵章題詩，在東祕書廳」という。
35 「置此憐神駿、三年故不飛。軒車寧假寵、野客會忘機。燕雀那相笑、鳧鷖直自肥。蓬莱千萬里、正想玉爲衣」（『全宋詩』巻六〇七）。
36 「樊籠毛羽日低摧、野水長松眼暫開。萬里秋風天外意、日斜閒啄岸邊苔」（歐陽脩「鶴」詩、『全宋詩』巻三〇二）
37 劉徳清らの「鶴」詩の「題解」（前掲書第一四六九頁）に、「詩歌描寫鶴鳥困樊籠的痛苦，以及回歸大自然的怡然自樂，寄寓作者的人生體驗。」という。
38 「仁宗朝，有數達官，以詩知名，常慕白樂天體，故其語多得於容易。」（『六一詩話』）
39 たとえば、「醉翁傳是昌黎之後身。」（梅堯臣「重賦白兔」）、「體備韓・馬，思兼荘・屈。」（曾鞏「祭歐陽少師文」）、「歐公亦不甚喜杜詩，謂韓吏部絶倫。」（劉攽『中山詩話』）など。
40 呂本中『江西詩派宗派圖』に挙げられている北宋後期から南宋前期の二十五人のうち、詩題から養鶴の事實を確認できた者はいなかった。
41 詩の末尾の「戛然長鳴乃下趨、難進而易退我不如」の「難進而易退」は、『禮記』「儒行」をふまえる。
42 王夢隱・張家順校注『慶湖遺老詩集校注』（第三六頁、河南大学出版社、二〇〇八年）巻第一「老鶴嘆」詩の箋注による。
43 王夢隱氏ら校注の前掲書の「賀鑄年譜」（第五七二頁）による。
44 賀鑄の「聞蘇眉山謫守英州」詩（『全宋詩』巻一一一一）に、「座偶鵬鳥敢要賦」という。
45 王夢隱氏ら校注の前掲書の中の、張家順氏の「序」（第三頁）による。
46 『舊唐書』巻一九二「隱逸傳序」。

【付表】北宋養鶴詩の作者とその作品

巻数は『全宋詩』。作者欄の印（◎△）は養鶴経験の有無を表す。

作者　生卒年	巻数	養鶴主（送主）	詩題	出身・進士及第・【養鶴地】等
◎△潘若沖　?-?	11	廖融（潘若沖）	留鶴贈廖融	桂林・零陵の知 【廖：衡山（湖南）】
	11	廖融	聞融與鶴相繼而亡感賦絕句	
◎△王禹偁 954-1001	63	王禹偁（柴侍御）	謝柴侍御送鶴	済州巨野（山東）。983 進士 【王：蘇州、羅：呉県（江蘇）】
	63	羅處約	羅思純鶴斃爲四韵吊之	
◎張維　956-1046	73		十詠圖　庭鶴	烏程（浙江）。
◎魏野　960-1019	80	魏野（馮亞）	謝馮亞惠鶴	蜀のち陝州（河南） 【魏：陝州】
	82	魏野	悼鶴	
	84		和人見詠新鶴	
	85	魏野（劉小諫）	謝劉小諫寄惠雙鶴	
	85	魏野（薛省判）	謝薛省判寄惠鶴	
	87	薛階	又次前韻兼乞鶴	
◎△林逋 968-1028	106		榮家鶴	【杭州錢塘】（浙江）。
	108	林逋	鳴皐	
◎智圓　976-1022	136	智円	庭鶴	錢塘（浙江）。 【西湖孤山瑪瑙禪院】
	138	智円	失鶴	
	141		戲題四絕句	
◎范仲淹 989-1052	167	范仲淹（柳太博）	謝柳太博惠鶴	呉県（江蘇）。1015 進士
△梅堯臣 1002-60	248	卞氏	同道損世則元輔遊西湖於卞氏借雙鶴以觀	宣州宣城（安徽）。 1051 同進士出身。 【卞：西湖、梅：汴京】
	258	梅摯	和公儀龍圖憶小鶴	
	258	梅摯	和永叔內翰思白兔答憶鶴雜言	
◎△文彥博 1006-97	274	文彥博（梅摯）	梅公儀見寄華亭鶴一隻	汾州介休（山西）。1027 進士
	276	陳虞部	依韻謝運使陳虞部生日惠雙鶴靈壽杖　四首	
△歐陽脩 1007-72	287	梅摯	思白兔雜言戲答公儀憶鶴之作	吉州永豊（江西）。1030 進士
	293	梅摯	憶鶴呈公儀	
	302		鶴	
◎△韓琦 1008-75	318	劉易（韓琦）	病鶴貽劉易	相州安陽（河南）。1027 進士。 【李：丹陽（江蘇）】
	322	韓琦（李公素）	謝丹陽李公素學士惠鶴	
△劉敞　1019-68	478		戲題歐陽公廳前白鶴	臨江軍新喩（江西）。1046 進士。

作者　生卒年	巻数	養鶴主（送主）	詩題	出身・進士及第・【養鶴地】等
△王珪　1019-85	491	梅摯	和永叔思白兔戯答公儀憶鶴雜言	成都華陽（四川）。1042 進士
△蘇頌 1020-1101	520		與諸同僚偶會賦八題 邑署獨鶴	泉州同安（福建）。 丹陽（江蘇）。1042 進士
△王安石 1021-86	559	邢太保	邢太保有鶴折翼以詩傷之客有記翎經冥三韵而忘其詩者因作四韵	撫州臨川（江西）。1042 進士。
△劉攽　1023-89	605		題歐公廳前兩鶴	新喩（江西）。1061 進士。
△蘇軾 1036-1101	820		鶴歎	眉州眉山（四川）。1057 進士
◎郟亶 1038-1103	843	郟亶	失鶴	太倉（江蘇）。1057 進士
△范祖禹 1041-98	886	李少師	遊李少師園十題　鶴	成都華陽（四川）。1063 進士
◎劉弇 1048-1102	1045	劉弇（石港高侯）	石港高侯見遺雛鶴輒成十五韵	吉州安福（江西）。1079 進士
△賀鑄 1052-1125	1102	海陵蘇氏	老鶴嘆	衛州（河南）。 【蘇：海陵（江蘇）】
△張耒 1054-1114	1181	欒家	七日晚同潘郎乘月到欒家觀鶴問石生羚羊角偶有之今早惠角一對良真是也吾藥遂成欣然作詩	楚州淮陰（江蘇）。1073 進士。
△李新　1062- ?	1254	郝氏	鶴雛引	仙井（四川）。1088 進士
△程俱 1078-1144	1420	趙子晝（柳元禮）	得叔問書報柳元禮許寄鶴二首	衢州開化（浙江）。1097 恩蔭。
◎孫覿 1081-1169	1486	孫覿（呉子仁）	山陽守呉子仁遺兩鶴喜而賦詩二首	晋陵（江蘇）。1109 進士。 【呉：山陽（江蘇）】
△王洋 1087-1153	1691	伯氏	逢伯氏舊鶴代賦	東牟（山東）、山陽（江蘇）。 1124 進士
? 張嵲 1096-1148	1837		詠鶴	襄陽（湖北）。1121 進士